

が生じたかの疑問をとく鍵になるかも知れない。つまり、陸上の生物は体制を $2n$ 優勢とすることによって進化を果した。生物体をして $2n$ 優勢とする方法は2つしかない。ひとつは、単相世代をなくすことであり、他の一つは単相世代を無限に

縮小することである。前者の道を歩んだのが動物であり、後者の道を歩んだのが植物だというわけである。後者の道からは必然的に異相交代という世代交代が生れてくる。

(抄録 清水建美)

【夏季例会会宿報告】

男山の植物を訪ねて

中山 冽

昭和52年8月27・28日の両日、長野県植物研究会の採集会が長野県の東端、南佐久郡川上村の男山(1851m)で行なわれた。参加会員は、清水、奥原、楯、山崎、伊藤(静)、堀米、清沢、北村、小林、横内、飯沼、伊藤(文)、大木、草間、白井、林、中山その他会員外3名であった。

今までの採集会になく盛会であったので幹事の顔もほくほくであったが、その内容もまた複雑となった。以下に順を追って報告いたします。

甲武信岳に源を持つ千曲川は川上村内を東西に流れて川上村の出口あたりで流れを南北に変える。この千曲川に沿って断層が走ると考えられている川上村の地質は大きく二つに分かれる。千曲川の南側は中生層の分布域でこれを貫いて金峰山塊の深成岩類(花崗岩)が被っている。これに対し北側は古生層が広く被っている。いわゆる秩父古生層である。男山はこの古生層の中に深成岩によって形成され、その名のような荒々しい山肌を持って立っている。これに対してなだらかな山形を持つ女山が千曲川の反対側の中生層の中にある。今回の調査対象となったのはこの男山である。

気象条件は年間を通して降水量が少なく、冬は寒く長く、夏は涼しく短かいという乾燥冷涼な気候である。昭和52年冬の最低気温 -23°C と記録されている(秋山地区標高1270m地点)、このような条件下での植生は比較的単純である。森林植生を概観的にみると、自然植生としては金峰山頂付近の2500m付近と甲武信岳山頂の一部に高山植生がみられる程度で、それ以下の2300m付近までにはオオシラビソ林が分布するが量的には少ない。従って亜高山帯を広く被うのはコメツガ林が主体となる。土壌の発達の違い、急峻な山岳を多く持つこの地域はコメツガの純林の発達が著しい。標高1400~1500m以下はミズナラやシラカンバの分布域となるが、現在はカラマツの植林が広く被っているため自然植生として残されている地域はほとんどない。一部岩尾根

などにアカマツ林が特徴的にみられる程度である。男山はこのコメツガ林域にはいるが岩肌の露出が多く傾斜も強いコメツガの発達もよくない。

第一日<8月27日> 午後5時30分頃、川上村御所平の山二旅館に集結する。夕食の後、全員参加のもとに長野県植物誌の調査計画を話し合った。各分担区域の予算案の調整、調査内容および採集計画の検討をする。夜の更けるのも忘れて熱心な討議が行なわれた。それらのまとめと県への調査補助のための申請書の作成を明日に残して第一日目を終わった。

第二日<8月28日> 午前8時朝食とする。朝早くから植物の観察に出かけた会員も多かった。

昨夜の会議のまとめと申請書作成のため清水会長と横内氏はその事務処理にあたることになったため川上第2小学校まで上ることになった。幹事の中山は男山へのガイドと第2小学校への案内を兼ねることになったが、とりあえず山の案内は佐久に明るい山崎氏に代行を願って男山の登山道入口で本隊を送った。その後、清水、横内の両氏を案内して第2小学校へ上ったが、二人の姿をみているとそのままだ置いて山の案内にもどることもできず事務の手伝いをする事になった。結局この書類作成の終わったのは午後3時であった。

一方本隊は幹事なしという異常なまま、男山の山頂まで調査・採集を行なって無事下山されてきた。午後3時30分頃、千曲川橋上で合流しお互いの労をねぎらいながら帰途についた。

終わりに林氏の男山採集記録を記しておく。

おしだ科—カラフトミヤマシダ かばのき科—ハシバミ ふな科—ミズナラ たで科—オオネバリタデ なでしこ科—フシグロ、フシグロセンノウ きんぼうげ科—クサボタン、レンゲショウマ くまつづら科—コウモリカズラ つばき科—ナツツバキ まめ科—イタチササゲ、ヤブマメ ばら科—イヌザクラ、クマイチゴ、ミヤマザクラ ふうるそう科—

タチフロウ しなのき科—モイワボダイジュ すみ
れ科—エゾノタチツボスミレ、ヒゴスミレ あかばな科—ミズタ
マソウ セリ科—アマニュウ、ノダケ、ヤマゼリ
もくせい科 ハシドイ しそ科—キセウタ、セキヤ
ノアキチヨウジ、ヒキオコシ、シナノアキギリ、ヤ
マハッカ ごまのはぐさ科—コシオガマ、トモエシ

オガマ、ミヤマママコナ、ヤマトラノオ ききょう
科—シデシヤジン、フクシマシヤジン きく科—イ
ヌヨモギ、イワイシチン、セイタカトウヒレン、ミ
ヤマアキノノゲシ、モリアサミ、ナンブアザミ、ナ
ガバノコウヤボウキ、ヤハズハハコ いね科—カリ
ヤスモドキ、ハネガヤ らん科—アツモリソウ

【秋季合宿調査報告】

小菅神社のキタゴヨウ林

伊 藤 静 夫

昭和52年10月1、2日の両日、植物研究会の採集
会が飯山市小菅神社を中心とした地域で行なわれた。
参加された会員は丸山、山越、犬飼、望月、清沢、
松田、和田の諸氏と幹事の伊藤であった。

小菅神社は飯山市の瑞穂地区の小菅にあり、奥社
本殿に通じる参道の両側には天然記念物の杉の大木
が美しい杉並木を形成している。樹種は裏日本型の
クマスギである。かつては奥社本殿までうっそうた
る杉並木であったが、風雪の災害によって倒れたり
害虫等の被害で枯れてしまい、現在では入口の鳥居
から約600mの所までが杉並木である。そこから上
は樹令の若い杉が点在し、往時をしのばせる杉の切
跡がある。奥社本殿は県の重要文化財で標高900m
の所にある。

今回の採集会の目的は、奥社の裏山に分布するキ
タゴヨウ林の調査と付近帯のフロラを調べることで
あった。

調査地域は長野県の北部、毛無山(1650m)の山
すそにあたり、千曲川の東側に位置する。県下の植
物区系からすれば裏日本要素の種が分布するところ
である。

10月1日 午後3時までに集合することになって
いたが、勤務を終えてかけつける者や松本や名古屋
市からの参加があり、全員がそろったのは夜8時ご
ろであった。そのため、採集会は行われず、夜地元
の丸山利雄先生から飯水地区の植物分布や先生が作
った標本についての学習会が開かれた。先生のため
まい研究活動には頭の下る思いであった。

10月2日、快晴で絶好の採集日和であった。目的
地に出発する前に丸山先生の案内で、野沢温泉の名
物野沢菜の発祥地やつつじ山をまわり、ユキツバキ
の見事な群落を観察することができた。一行は途中
で参加された和田氏を含めて、北竜湖を回って小菅
神社へと向かった。以下、出現した種について記載
する。

調査番号	1	2		
調査年月日	'78 10.2	10.2	オオバクロモジ	+2
海拔高(m)	900	900	ヒメアオキ	+ +2
方位・傾斜	S15° NW25°		ヒトツバカエデ	+ +
調査面積(m ²)	400	400	アズキナシ	+
高木第一層	24/50	23/40	コハウチワカエデ	1.2
高木第二層	10/10	10/80	ヤマグルマ	+
低木層	5/90	2/60	ヤマツツジ	1.2
草木層	0.3/20	0.3/40	ハナヒリノキ	+
出現種数	33	42	ハイイヌツゲ	+
〔高木第一層〕			チャボガヤ	+
キタゴヨウ	3.4	3.4	コミネカエデ	+
ブナ	1.2		ヤマウルシ	+
ミズナラ	1.2		ハイイヌガヤ	+
〔高木第二層〕			ムラサキヤシオ	+
ミズナラ	2.2	+	コマユミ	+
ブナ		5.5	ツノハシバミ	+
ハウチワカエデ		1.2	アオダモ	+
タムシバ	+		コシアブラ	+
コハウチワカエデ	+		アラゲアオダモ	+
オオヤマザクラ	+		〔草本層〕	
〔低木層〕			チゴユリ	+ +2
ミズナラ	4.5		カンヌゲ	+ +
ハウチワカエデ	1.2	+	スノキ	1.2 +
マルバマンサク	1.2	+	ツルマサキ	+ +
タムシバ	+	1.2	ツルリンドウ	+ +
ブナ	+	+	ツルアリドウシ	+ +
エゾユズリハ	+2	1.2	ツルデマリ	+
サイゴクミツバ	+2	+2	コハウチワカエデ	+
ツツジ	+	+	アオダモ	+
ミヤマガマズミ	+	+	ミズナラ	+
リョウブ	+	+	ノリウツギ	+
ホツツジ	+		サワダツ	+
オオカメノキ		2.3	シンガシラ	+
			エゾユズリハ	+
			オクモミジハグマ	+
			ウリノキ	+
			ヒメモチ	+
			ホツツジ	+